

# 木更津市史編さんだより

木更津の歴史・文化・自然再発見マガジン

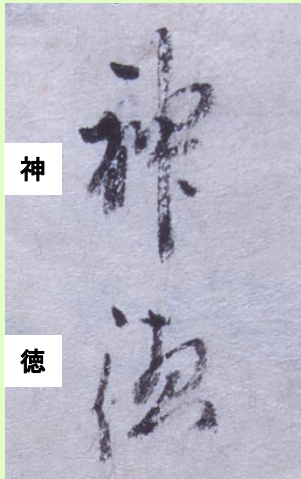


発行者 木更津市教育委員会 教育部文化課

〒292-8501 木更津市朝日3-10-19 木更津市役所朝日庁舎

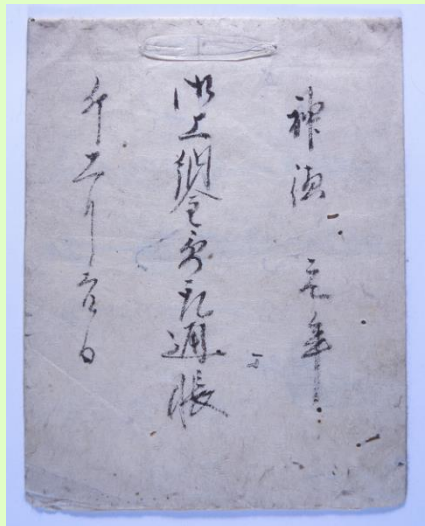
Tel:0438-23-5309 Fax:0438-25-3991 E-mail:bunka@city.kisarazu.lg.jp

## 第4号



神

徳



神徳元年 上納金受取帳

(袖ヶ浦市郷土博物館提供 切替家文書)

### 改元と私年号 神徳

今年五月に元号は「平成」から「令和」へ改元し、新しい時代の幕開けとなりました。

ところで、昨年の平成三十二(二〇一八)年は、明治元(一八六八)年から数えて一五〇年にあたることから、明治一五〇年を記念して木更津市史編さん事業公開講座を開催しました。

慶応四年九月に、元号は「明治」に改元され、日本は天皇を中心とする近代国家へ歩み始めましたが、その前年の慶応三年、木更津市域とその周辺で「神徳」という私年号が使われていま

た。

**私年号とは** 朝廷が正式に定めた年号以外の年号(角川新版『日本史辞典』一九九七年を参照)のことで、北片町(木更津市)に住んでいた木更津船の有力な船持石渡半兵衛と、横田村(袖ヶ浦市)の名主との間で交わされた取引帳簿「通帳」の表紙に「神徳元年」と記されています。

この私年号が使われた理由は不明ですが、その頃、将軍と天皇が相次いで死去して代が替わったり、慶応二年に木更津村で起こった米穀商の打ちこわしなどの不穏な雰囲気が残っていたことから、新しい時代を求める表現として、全国的にもめずらしい私年号が使われたものと推定されています。しかし、こうした私年号の使用も、翌年の慶応四年に京都で起こった戊辰戦争(一八六八〜一八六九)によって幕府は倒れ、明治時代と変わっていく中で使われなくなったものと考えられます。

※市制施行七〇周年記念 図説木更津のあゆみ』一六五、一六六頁 五 幕末の木更津―打ちこわしと私年号―(二〇一三)を改変して掲載。(事務局)

### 「だてん」木更津の街を駆ける

近現代部会 栗原克榮

木中生の房総一周マラソン 今年、木更津市在住の方から、四葉の写真を提供していただ



房総一周マラソンに出発する選手達

た。

その一葉の裏面には、大正十二拾(年)三月式十四日 木更津中学校縣下一周マラソン隊」と墨書されている。場所は、カサハキモノ京屋履物店」と八劔八幡神社鳥居の角である。A K I B Aと書かれたランニングを着て時刻を確認しているのは、木更津中学校(現千葉県立木更津高等学校)教員の秋葉祐之である。秋葉の後ろに並び、木中の「K」のマークをつけた揃いのランニング姿は木中陸上部生徒たちである。秋葉の隣で時

計をのぞきこんでるのは中山音弥校長、その右はこの房総一周のマラソンを裏方として支えた卒業生の一人である石川寛である。この時の写真は、もう二葉あり一つは八劔八幡神社の社殿前、一つは鳥居前でいずれもマラソン隊を見送る町民たちに囲まれた記念写真である。

大正十二(一九二三年)三月二十四日木更津町を出発した一行はこの日は佐倉まで走り、二十五日は佐原、二十六日は銚子、二十七日は成東、二十八日大原、二十九日天津、三十日勝山へと走り継ぎ、最終日の三十一日は勝山を発つて木更津に到着した。木更津到着は午後四時、校友や生徒等多数の歓迎を受け、萬歳の声があがる中元気旺盛で無事帰校した。約四三五キロに及んだこのマラソンは、一日に走った距離は平均すると約五十キロにもなった。

**秋葉のマラソン奨励** この房総一周マラソンは、当時人々の関心を集め、新聞はその様子を次のように報じている。

北條町を過ぐ マラソン選手 縣立木更津中学校縣下一周マラソン選手一行は卅日午前八時安房郡天津町を發し沿道各町村で歓迎と応援を得て正午和田町を経て十里の行程を五時間三十分で午後一時三十五分北條町に入り中学校職員生徒等の熱誠なる歓迎を受けて同町安房銀行前に休憩し同所に演壇を設けて秋葉教諭よりマラソン一周の経過を

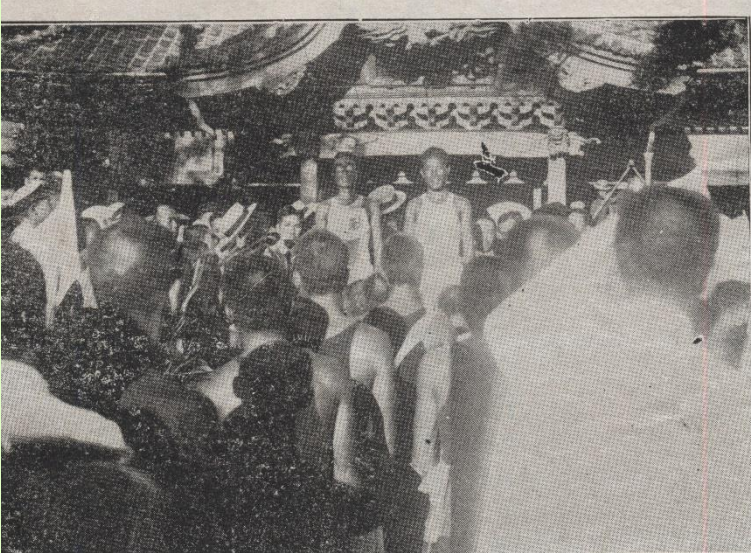
講演し午後三時安房中学校を出発勝山町に赴き一泊した今日三十一日は鋸山の險を踏破帰校の予定」(『東京日日新聞』房総版、大正十二年三月三十一日)

記事の中に 秋葉教諭よりマラソン一周の経過を講演」とあるように、行く先々で秋葉はマラソンを宣伝した。秋葉は木中の校友会誌の中でも、マラソンの良さを説明してる。(イ)何時でも行われ易いこと(ロ)多くの時間を要しないこと(ハ)一定の運動場がいらぬこと(ニ)何にも器具を要しないこと(ホ)人数には制限がないこと(ヘ)費用が全くいらぬこと(ト)多の運動に比較して運動量が大きいこと(コ)千哩マラソン、競芳会雑誌」十八号)。房総一周マラソンは、マラソンを奨励し宣伝することも目的であった。

この房総一周マラソンは、翌年にも第二回が行われた。提供写真のうちのひとつは、大正十三拾(年)三月式十五日 第二回縣下一周マラソン隊」との裏書がある。八劔八幡神社の鳥居下に勢揃いした木中のマラソン隊は、前年九月一日の関東大震災に見舞われた房総を、激励の思いを込めて駆け抜けていったのであろう。

**金栗四三と秋葉祐之** 今年のNHK大河ドラマ「いだてん〜東京オリムピック噺〜」の前半の主人公は、日本人で初めてオリムピックに参加し、日本のマラソンの父」と言われる金栗四三であった。木中陸上部の房総一周マラソンの元は、金栗





金栗(右)秋葉(左)両選手の町民歓迎会

と秋葉の出会いがあった。

金栗は、単に自分がランナーとして走るだけでなく、有為な人材を育てあげることにも尽力する。その金栗に見いだされた一人が、秋葉祐之であり、そこから「だてん」金栗と木更津の繋がりが生まれたのである。そして、金栗が木更津の街中を走ったことや、木中陸上部の生徒と駅伝をしたことを知る人は少ないであろう。

秋葉は蓮沼村(現山武市)で農業を営む家に明治二十八(一八九五)年に生まれた。七人兄弟の長男であったが、学業優秀だったことから大正

二(一九一三)年に千葉師範学校(現国立大学法人千葉大学)に進学している。秋葉の四歳年上の金栗は、この前年に開かれたストックホルム・オリンピック大会のマラソンに出場。途中棄権に終わるが、翌年には東京高等師範学校(現国立大学法人筑波大学)の徒歩部(陸上部)室長になり、鍛えがいのある若手ランナーを探し訪ねていた。秋葉は金栗に誘われ、大正五(一九一六)年に東京高等師範学校へ進み、長距離ランナーとしての才能を開花させていった。

**樺太―東京間のマラソン** 金栗四三は秋葉祐之と共に、大正八(一九一九)年、山口―東京間のマラソンに挑んだが、その集大成ともなるのが、大正十一(一九二二)年に走り通した樺太―東京間のマラソンであった。この時、秋葉はすでに木中で教鞭を執り、勉学のかたわらマラソンの楽しさを生徒たちに伝えていた。

金栗と秋葉は、樺太の真岡をスタート地点とし、ゴールの東京高師のグラウンドを目指した。当時の新聞は、到着の様子を次のように報じた。疲れた風もなく、金栗秋葉両君著京

樺太から十九日間で、三百四十里を走ってマラソンの勇者金栗四三、秋葉祐之両選手は樺太北海道及び本州の半分その行程三百四十里を踏破し廿六日午後五時無事大塚高師のゴールに入った、此の日午前六時小山の最後の宿舎を出発烈風中腹這いして利根川鉄

橋を渡り久喜町を経て大宮に入りこゝで出迎への東京医専、埼玉師範及び早実各選手が加わり東京に向かったが戸田村付近は出水の為め川口から赤羽迄汽車により赤羽からまた駆けて午後四時半板橋に入った、こゝにも秋葉氏が奉職先の木更津中学の選手十名が出迎え賑やかな一団となり母校に着いた、…因みに両選手はまた走り足りないとして今日廿七日は午前六時高師校庭出発木更津中学選手と共に木更津迄廿里を突破し同町主催の歓迎会に出席するそう、樺太の最初の日も大歓迎で一日余計走らされたがあとは秋葉君の御相伴です」と金栗氏は笑っていた(『東京日日新聞』大正十一年八月二十七日)

東京を出発した金栗・秋葉両氏は、木更津の街を疾走し八劔八幡神社に到着した。木中の校友会誌『致芳会雑誌』(一八号)の口絵には、本殿前で開催された、木更津町民による金栗と秋葉両氏の歓迎会の写真が掲載されている。本殿を背に金栗・秋葉が立ち、その前に伴走した木中陸上部生徒のランニング姿が、それらを多くの町民が取り巻いている様子が写っている。



トピックス

木更津市の自然 里山・谷津田の四季

自然部会 成田篤彦

台地や丘陵地の谷筋にはそれぞれ里山・谷津田や堰(せき)があります。そこには低地の温暖な地にすむ普通の種が生息し、種の多様性が保持されています。また、里山・谷津田は最も身近な自然の一つですが、今では多くが失われ、貴重な自然になりつつあります。市内には見事に整備された美しい里山・谷津田があります。ここではそこに息づく四季の生物たちを紹介します。



1-1 春の里山・谷津田 2018.3.18 木暮文雄氏撮影

早春・春 里山は萌黄(もえぎ)色のコナラの若

芽、ヤマザクラの花、濃い緑色のシイやカシや黒緑色のスギなどでモザイク状におおわれています。林縁ではキブシの淡黄色の花穂(かすい)が鈴なりに垂れ下がり、クロモジが小さな花をたくさんつけています。木陰ではイチリンソウ、ニリンソウが咲いています。この二種は、春植物といわれ木々の葉が広がらない早春に、地下の貯蔵器官の栄養で、急激に成長、開花し、実をつけます。夏の間は休眠しています。多くの人々が、この植物の美しい花と短い一生を愛おしく感じています。

農道の土手には空色のオオイヌノフグリ、黄色のカントウタンポポやオオジシバの花が咲いています。陽がさす斜面には紫色のタチツボスミレ、紅紫色のホトケノザの花が風にそよいでいます。

成虫で越冬していたルリタテハ、キタテハやヒメアカタテハ、キタキチョウが農道ではねを広げて陽を浴びています。春にさなぎから羽化したツマキチョウやモンシロチョウがタンポポの蜜を吸っています。

谷津田に水が張られ、昼間でもシュレーゲルアオガエルが「ケロケロケロ・・・」と鳴いています。谷津田の奥ではヒキガエルが産卵にやってくる、メスを争うオスたちのガマ合戦が見られます。上空から、クッピョー、クッピョー」とサシバの音が響き



1-4 タチツボスミレ 2006.3.26



1-3 ニリンソウ 2017.3.26



1-2 キブシ 2006.3.23



1-7 サシバ 2015.4.17



1-6 ツマキチョウ 2006.4.5



1-5 シュレーゲルアオガエル 2007.4.27





2-1 夏の里山・谷津田 2017.7.7

渡ります。サシバは小型のタカで東南アジアから子育てにやってきたのです。サシバは近年、数が減少し、千葉県最重要保護生物に指定されています。

コナラの若芽、ツマキチョウ、サシバが目に入るともう風光る春たけなわです。

**初夏・夏** スダジイの淡い黄色の花が里山に目立ちはじめると初夏の空気が充満します。稲が太陽の日差しを浴び、ぐんぐん生長していきま

す。丘陵地の崖地には清水がしたり落ち、アジサイの紫色の花が咲き誇ります。崖地の隙間にはサワガニが何匹も潜んでいます。林縁には、ネムノキの桃色の花、ガマズミの白い花が咲き、

イラクサやヤブマオの群落が生育しています。夏の終わりにはキツネノカミソリが真っ赤な花を咲かせます。

ウグイスがひっきりなしに鳴き、遠くで、オツキヨ、キョキヨ・」とホトトギスも鳴いています。ホトトギスはウグイスの巣に卵を産み、子育てをさせます。谷津田跡の水たまりにハラビロトンボが、イノシシ柵の上にオオシオカラトンボが、林道にはオニヤンマがゆうぜんと飛んでいます。

谷津田奥の小池の上にコナラの枝が伸び、そこに、黄色の花をつけた、つる植物のスイカズラが巻き付いています。小池からモリアオガエルの「グツグツ」という低い鳴き声が響いてきます。また、カラスアゲハやモンキアゲハ、アオスジアゲハがヒメジョオンの花に飛び交います。7月初旬にニイニゼミが、続いて、ヒグラシ、アブラゼミ、クマゼミ、ミンミンゼミ、ツクツクボウシが鳴きます。ツクツクボウシは十月初旬まで鳴いています。

夜間、農道のススキ原ではキリギリス類のシブイロカヤキリが「ゾー」とうるさいくらいに鳴いています。ゲンジボタルやヘイケボタルが光の糸を引いたように稲穂の間を飛び交います。風薫る初夏は最も美しく生き生きとした季節です。

炎暑の真夏にはあでやかな緑色のタマムシが陽を照り返し、エノキの周りを飛んでいます。草むらではキリギリスが「ゾー、チョン・ジー、チョン」と鳴きます。



2-4 キツネノカミソリ 2006.8.18



2-3 ネムノキ 2012.6.29 木暮氏撮影



2-2 ガマズミ 2006.5.26



2-7 ヤマトタマムシ 2016.8.21



2-6 カラスアゲハ 2011.5.14



2-5 モリアオガエル 2018.5.5





3-1 秋の里山・谷津田 珍しいオダカケ 2017.9.19

**秋** 稲刈りは八月下旬〜九月には大部分が終わります。稲刈りがすみ、モズの高鳴きを聞くとさわやかな秋がやってきたと感じます。  
土手にススキの穂がなびき、ヒガンバナの花があちこちの畦に現れます。林縁にはユウガギクなどの白い花、ヤクシソウ、アキノキリンソウなどの黄色い花、ノハラアザミ、リンドウ、カントウヨメナなどの紅紫色の花が次々と咲き出します。稲の二番穂が出るころ、ノシメトンボ、ナツアカネ、アキアカネなどの赤とんぼのオスとメスが連結して、田んぼや水たまりに産卵する姿が見られます。また、土手の草むらにはオンブバッタ、シヨウ

リヨウバッタ、トノサマバッタなどが跳びはねています。夜間、土手のクズが生えるススキの原ではカンタンが「ルルルル」と繊細な声で、エンマコオロギが「コロコロリーリー」と美しく鳴きます。  
晩秋にはガマズミがきれいな真つ赤な実を、ムラサキシキブが美しい紫色の実をつけます。ヤマザクラやハゼノキやヌルデなどの紅色の葉などの紅葉が見られ、ツグミやアカハラなどの渡り鳥がやってきます。丘陵地では数頭のニホンジカや二十〜三十頭のニホンザルの群れが出没します。秋は生物には夏の終わりであり、冬の前ぶれで、越冬の準備を始めます。  
**冬** 年内は比較的暖かく穏やかな日が続きます。谷津田ではナツアカネが十二月初旬まで陽を浴びています。成虫越冬のキタテハなどの虫たちも活動します。夏ミカンの実がなり、南国から近年定着したナガサキアゲハがさなぎで越冬しています。スイバやハコベやセリなども冬越しに入ります。年を越し、一月には温暖前線が通過するとトウキョウサンショウウオやニホンアカガエルなどが谷津田に集まり、産卵を始めます。この両生類を捕食しに、夜間にタヌキやイタチ、外来種のハクビシンなどが現れます。二月には梅が咲き、フキノトウがでてきます。市内では雪がたまに降りますが、霜が降りない地域で越冬する昆虫、オオキンカメモシが藪のなかで寒さに耐えていたこともあります。南国の生物が侵入・定



3-4 ムラサキシキブ 2005.11.23



3-3 リンドウ 2006.11.4



3-2 カントウヨメナ 2005.10.26



3-7 ニホンジカ 2016.11.12



3-6 ツグミ 2015.10.31



3-5 アキアカネ産卵 2015.10.12





4-1 めったにない里山の雪景色 2006.1.22

着する重要な条件は冬の環境に耐えられることです。寒暖を繰り返して、次第に気温が上昇し、短い冬が終わります。

**おわりに** 木更津市は暖温带で、ここ十年間の一月の平均気温約五・八度、八月約二七度、年平均気温は約一六度、年平均降水量は約一六〇〇ミリです。台地や丘陵地の地下は砂層などの水の通しやすい地層と粘土層などの不透水層が積み重なってできており、東京湾に向かって緩やかに傾いています。そのため、地下水が豊富に湧き出します。市内でも弥生中期には当時の土木技術を駆使し、湧水を使って、谷津低地を

水田化し、そして、原生林のスタジイ・カシの常緑樹林をコナラなどの落葉広葉樹林に仕立て、里山・谷津田を作ったと思います。これは環境改善と同時に新しい文化(衣食住・技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治・生活様式などが自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果)の形成の始まりだと思っています。

一方、それ以前は、例えば、春植物は落葉樹林内で、カエル類は狭い湿地で細々と生息していたはずですが、里山・谷津田という新たな環境では広く、繁栄しています。

人々が自然条件(風土)をもとに、環境を変えし地域の文化を作り生活します。その影響を受け、生物などの自然の様相が変わってきます。そして、それをもとに、また、新たな文化が生まれます。そのため、自然と文化・歴史を合わせて理解しないと現在の市内の自然や文化の成り立ちは分かりません。また、身近な自然を調べ、記録することが、現在の文化を記録することに繋がります。その意味で、地史、地質、気候、生物などをしっかりと調査し、後世に伝えることが大切だと思っています。

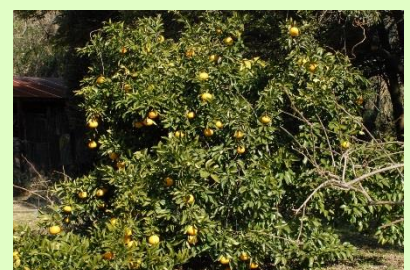
**参考文献** 市制施行七〇周年記念 図説木更津のあゆみ(二〇一〇)一九〜二二、七〜四八頁。気象庁木更津市年ごとの詳細(気温)と詳細(降水量)(二〇一九.五.五)。広辞苑。



4-4 フキノウ 2006.2.28



4-3 梅の花 2006.2.19



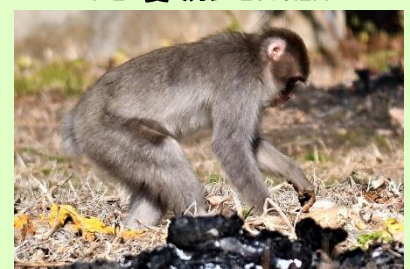
4-2 夏ミカン 2015.2.4



4-7 トウキョウサンショウウオのオスと卵のう 2006.2.28



4-6 雪中のオオキンカメムシ 2006.1.22



4-5 ニホンザル 2018.1.21 田村満氏撮影

松面古墳の修羅

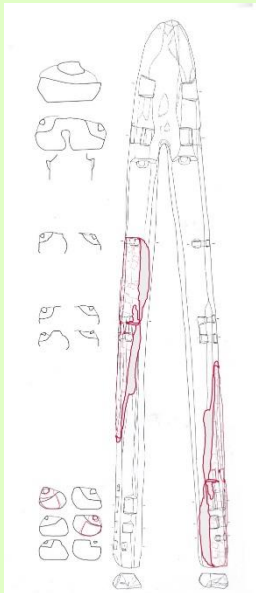
松面古墳(まつめんこふん)は、木更津市朝日二丁目にあった古墳時代終末期の方墳で、浜堤(ひんてい)と呼ばれる砂堆上に造られていました。古墳の周辺には、金鈴塚古墳(きんれいづかこふん)や稲荷森古墳(とうかんもりこふん)などの前方後円墳や、方墳の塚の腰古墳(つかのこしこふん)などがあり、これらの古墳を含めて浜長須賀古墳群(はまながすかこふんぐん)と呼ばれています。また金鈴塚古墳から出土した金鈴や飾大刀(かざりたち)などは、国の重要有形文化財に指定されています。

松面古墳は、昭和十三(一九三八)年に君津病院(現在の君津中央病院)の建設を行った際に横穴式石室が露出し、石室から金銅製双龍環頭大刀(こんどうせいそうりゅうかんとうたち)、振環頭大刀(ねじりかんとうたち)などの飾大刀三本以上、金銅製馬具三組、金銅製木葉形腰佩(このはがたようはい)一組、須恵器(すえき)などの副葬品が出土しました。古墳の造られた時代は、副葬品から七世紀初頭と考えられています。

**修羅の出土** 平成二十六年年度の発掘調査で、墳丘の一边が約四五メートル、外側の周溝を含めた大きさは約八四メートルもあり、千葉県で三番目の大きさの方墳であることが判りました。また、古墳の周溝から「修羅(しゅら)」と考えら



松面古墳(左)と塚の腰古墳(右)



松面古墳から出土した修羅と復元図(左図は三ツ塚古墳出土の修羅)  
 図20「三ツ塚古墳出土大修羅・小修羅・テコ棒実測図」『修羅！ その大なる遺産  
 古墳・飛鳥を運ぶ』大阪府立近つ飛鳥博物館(1999) に一部加筆して掲載

れる木製品が出土しました。修羅とは、石などの重いものを運ぶために使われたソリで、古墳時代のものとしては大阪府藤井寺市の三ツ塚古墳に次いで二例目の発見です。松面古墳の修羅は、一部しか残っていませんでしたが、三ツ塚古墳のものの特徴が似ていることから判断しました。木の種類はムクノキで、長さ一三九・五センチメートル、復元した大きさは三五メートル程です。特徴は、上面を平らに作り、縄をかけた柄穴(ほぞあな)を一箇所開けています。裏面に擦れた際にできたと考えられる傷があります。修羅が周溝の中から見つかった理由は、壊れて使用不能となったため、あるいは、古墳完成後の儀式の中で、故意的に壊して捨てたのではないかと考えられています。

修羅の発見は、古墳時代当時の土木技術を考える上でも重要な発見といえ、現在は腐朽を防ぐための保存処理を施して管理しています。(事務局)

参考文献 松面古墳出土双魚佩の図上復元

- ① 木更津市文化財調査集報「一四(二〇〇九) 木更津市教育委員会、木更津市埋蔵文化財発掘調査報告書 第一三集 千葉県木更津市
- ② 塚の腰古墳・松面古墳発掘調査報告書(二〇一六) 木更津市教育委員会



## 市史編集部会の活動報告

これまで、皆さんから寄せられた貴重な情報をもとに木更津市史編さんに関する資料調査を行っております。地域で受け継がれている風習や伝統行事。あるいは、皆さんのお手元に残る古文書や古い町並みの写真、農具、民具などがありましたら、情報提供のご協力をお願いします。

## 考古部会

遺跡地図の作成や、発掘調査報告書のデータスキニングの他に、弥生土器の関連資料分析、諏訪谷横穴墓群出土の人骨調査、近世石塔の調査などを行っています。また「史料編」の構成を協議し、一部原稿執筆を開始しています。

## 古代部会

史料編の入稿原稿や、望陀布などに関する史料の掲載について検討を行っています。

## 中世部会

上総武田氏や里見氏関係文献の調査の他に、金沢文庫及び慶応義塾大学図書館など県外の機関が所蔵する木更津市関係文書の調査を行っています。また、今後の調査計画について検討しています。

## 近世部会

田川・下郡・茅野・方石・中郷・大寺・貝渕・小浜地区の個人宅で収集した史料の調査、

目録作成及び撮影を行っています。また中郷地区では文化財及び史料の所在調査、木更津・貝渕・波岡地区では聴き取り調査を行っています。この他、今後の調査計画の検討や翻刻ボランティア説明会を行い、翻刻文を作成しています。

## 近現代部会

千葉県文書館や市内の公民館、図書館、郷土博物館のすぐが所蔵する史料の調査、目録作成及び撮影を行っています。また下郡・矢那・岩根・中郷・中央・新田地区の個人宅や商店などで収集した史料や土地区画整理組合関係資料の調査、目録作成及び撮影を行った他、馬來田・方石・中央・請西地区の聴き取り及び史料調査を行っています。

建物調査については、下郡・方石・高柳・中央・新田地区の土蔵や、商店及び公会堂などの調査、作図及び原稿執筆を行っています。

## 民俗部会

吾妻・朝日・太田・請西地区の伝説などに関する聴き取り調査や、木更津市立図書館や県外の機関が所蔵する木更津市関係文書の調査を行っています。また今後の調査計画について検討しています。

## 自然部会

環境及び気候は、環境と低生動物について種リストデータベースの形式の検討、市内の気温の温暖化傾向や年間降水量の調査、気

象資料の収集及びデータ分析の方法などを検討しています。

地学は、下総層群中のテフラ鍵層や地蔵堂・藪化石帯の原稿執筆を開始しています。

動物は、田川・真里谷・音信山・丹原・茅野・伊豆島・矢那・中野・久津間・牛込・畔戸・方石・長須賀・太田・祇園・清川・請西・潮浜地区及び、小櫃川河口干潟の鳥類・魚類・昆虫類の調査や、写真による同定及び文献調査を行っています。

植物は、千葉県立中央博物館と合同調査を継続した他、市内全域で巨樹・巨木の調査を行っています。また台風十五号(九月八日)、十九号(十月十二日)、大雨(十月二十五日)によって倒木した巨樹・巨木の調査を行っています。



2019年9月8日に上陸した台風15号の影響で、幹の一部が折れた市指定文化財「鎌足桜祖株」

※現在は、枯死を防ぐための措置を施しています。



平成30年度木更津市史編さん事業  
公開講座「明治150年記念 木更津  
地域から見た明治」の様子

お知らせ

令和元年度木更津市史編さん事業公開講座  
座 鎌倉く戦国時代の木更津」を開催しま  
す。

日時 令和二年三月二十日(祝日) 午後一時

三十分受付 午後二時開始

場所 木更津市民会館中ホール(貝渕二―一三

―四〇)

講師 木更津市史編集部会 中世部会長

滝川 恒昭(たきがわ つねあき)氏

木更津市史編集部会 中世部会委員

盛本 昌広(もりもと まさひろ)氏

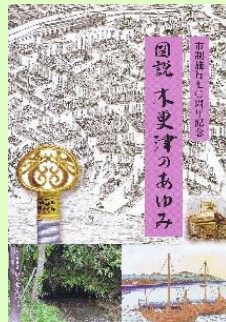
他

※応募方法は、木更津市の広報二月号(予定)  
またはホームページ等でお知らせいたします。

刊行物のご案内

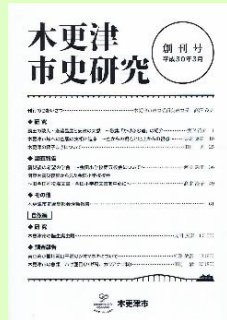
木更津市史編さんに関する刊行物を文化課  
で販売しております。

市制施行七〇周年記念 図説木更津のあゆみ



(A四版 本文二七  
四ページ) 二〇〇  
〇円 内容 木更津  
の歴史・文化・自然  
を写真や図版を多  
く使ってわかりやす  
く解説しています。

木更津市史研究』創刊号(A四版 本文一〇二



ページ)五〇〇円  
内容 勤王の歌人・  
齋藤昌麿と安政の  
大獄(實形裕介)  
木更津市域への空  
襲の実相に迫る」  
(栗原克榮) 木更

津の獅子まきについて(田村勇) 震災後の希望  
の学舎(渡邊義孝) 関東大震災復興から見た  
金田小学校校舎(高木澄子) 木更津市の陸生  
爬虫類(成田篤彦) 東京湾小櫃川河口干潟の  
シオマネキについて(相澤敬吾) 木更津市の魚  
類(ハゼ亜目(ハゼ科、カワアナゴ科))(田村満)  
木更津市史研究』第二号(A四版 本文一〇八

ページ)五〇〇円



内容 中世におけ  
る木更津と本牧の交  
流(上)(盛本昌広)  
江戸時代における  
木更津市の教育環境  
(上)(川崎史彦) 日

露戦争後の地域社会(池田順) 木更津県にお  
ける育児救済政策資料からの一考察(駒早苗)  
浸透実見池の水質の特徴とカワウコロニーがそ  
の水質に与えた影響について(湯谷賢太郎) 木  
更津市の蝶(相澤敬吾) 木更津市の汽水・海  
水魚(田村満) 木更津市の両生類(成田篤彦)  
木更津市史編さん事業公開講座記録集』平成  
二十六〜二十八年年度版(A四版 本文九〇ペー



ジ)五〇〇円  
内容 盤洲干潟のい  
きものたち」中世く  
戦国 時代江戸湾を  
めぐる武田氏 ―戦  
国時代の木更津と真  
里谷武田氏― 市

史を編さんするということ」(こんなに身近に宝  
があった!〜木更津の古民家・近代建築をたず  
ねて〜)  
木更津市史編さん事業公開講座記録集』平成  
二十九年度版(A四版 本文三二ページ)五〇〇

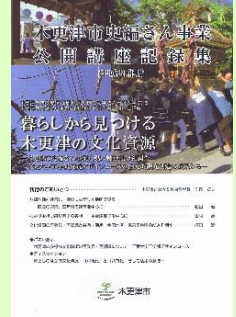




出土品が国の重要文化財に指定されている  
金鈴塚古墳の魅力を紹介するイラストパンフレット

『**教えてきさポン! 金鈴塚のひみつ**』を発行  
しました。

『**その他のお知らせ**』  
『**令和元年度の刊行予定**』  
『**木更津市史研究**』第三号(A四版)  
『**木更津市史編さん事業公開講座記録集**』平成  
三十年度版(A四版)内容「明治一五〇年記念  
木更津地域から見た明治」

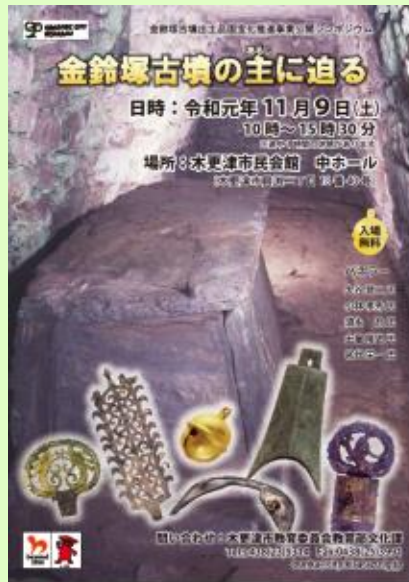


円  
内容 暮らしから  
見つける木更津の文  
化資源」

ト 『**教えてきさポン! 金鈴塚のひみつ**』  
(八ページ)を作成し、  
市内の小学校三年  
生から五年生に配  
布しました。  
興味のある方は、  
パンフレットを木更津  
市のホームページの  
市の紹介)↓ 歴

史・文化財)↓ 指定・登録文化財)に掲載して  
おりますのでご覧ください。

『**金鈴塚古墳出土品国宝化推進事業公開講  
座シンポジウム 金鈴塚古墳の主(あるじ)  
に迫る**』を開催しました。



十一月九日(土)に市民会館中ホールにおいて、  
古墳時代を代表する古墳の一つである金鈴塚  
古墳について、これまでの研究成果をもとに五  
名のパネラーそれぞれの視点から、金鈴塚古墳  
に埋葬された主について迫りました。

金鈴塚古墳は墳丘長九十メートルと推定さ  
れる前方後円墳ですが、現在は後円部の一部を  
残すのみです。後円部中央には南に開口する横  
穴式石室が設けられ、内部には緑泥片岩製(り  
よくでいへんがんせい)の組合式箱形石棺(くみあ  
わせしきはこがたせつかん)が置かれています。



金鈴塚古墳の石室(右)と石棺(左)

※現在は、石室の見学用に作られた石段付近が壊れや  
すくなっているため、立ち入りはご遠慮ください。

千葉県指定文化財 金鈴塚古墳

※古墳の周辺は住宅街となっており、後円部の  
一部のみ残っています。



シンポジウムの様子

※5人のパネラーによる発表のあと討論会を行い、  
金鈴塚古墳に関する総合的な理解を深めました。

古墳は六世紀末に造られたと考えられ、少なくとも三回の埋葬(まいそう)が確認されています。出土した遺物は、金鈴塚古墳の名前の由来となった純金製の鈴や各種の金銅製品(こんどうせいひん)が豊富なこと、飾大刀(かざりたち)の種類と数が日本で一番多いことなどから、この古墳に葬られた被葬者(ひそうしや)の力が大きかったことがわかります。そのため、出土遺物は古墳時代後期の文化を示す代表的な資料として国の重要文化財に、古墳の墳丘と横穴式石室は千葉県の史跡にそれぞれ指定されています。

※金鈴塚古墳の解説文を一部改変して掲載。(事務局)

シンポジウムの発表内容

飾大刀から金鈴塚古墳の主に迫る」

島根県立松江北高等学校

大谷 晃二(おおたに こうじ)氏

馬具から金鈴塚古墳の主に迫る」

朝日新聞社

宮代 栄一(みやしろ えいいち)氏

装身具から金鈴塚古墳の主に迫る」

宮内庁書陵部

土屋 隆史(つちや たかふみ)氏

石室、石棺から金鈴塚古墳の主に迫る」

松戸市立博物館

小林 孝秀(こばやし たかひで)氏

古代史から金鈴塚古墳の主に迫る」

高崎市教育委員会

須永 忍(すなが しのぶ)氏



編集後記

台風十五・十九号や大雨などで被害を受けた皆様には、心よりお見舞い申し上げます。あわせて、復興に向けさまざまなお支援をいただいている皆様に心より感謝申し上げます。

このたび、栗更津市史編さんだより『第四号』を発行します。本誌は、十一月三日の市制施行記念日に発行する予定でしたが、編集の遅れから十一月十一日の発行となりました。

本年五月から元号は「平成」から「令和」に変わり、各地で関連する行事が行われています。第四号では、元号改正に関連して幕末に使われた私年号や、NHK大河ドラマ「いだてん」の主人公金栗四三と栗更津のかかわりなどについて紹介しています。ぜひご覧ください。

これからも、新たな『栗更津市史』編さんの中でわかった栗更津の歴史・文化・自然について紹介いたします。

なお、市史編さんだよりは、市のホームページでもご覧いただけます。

(事務局)